

## 症例からみる診療のポイント

**Case.2 | 減薬しながら併発する膿皮症も改善した症例**
**プロフィール** フレンチ・ブルドッグ 1歳7ヶ月 未避妊雌

**診断** 犬アトピー性皮膚炎 (CAD)、細菌性毛包炎

**ポイント** CADに対するオクラシチニブの減薬  
 細菌性毛包炎の症状の改善 / 再発防止

## 症例経過

## 症例背景

1歳齢で発症したフレンチ・ブルドッグのCAD症例で、細菌性毛包炎を頻回に併発していた。CADの症状としては、顔面、四肢端を中心に慢性的な痒痒と皮膚炎を認めた(図1, 2)。細菌性毛包炎の皮膚症状は脱毛や表皮小環であり主に下腹部および体幹部に分布していた(図3, 4)。

## 初診時



(図1) 顔面の痒痒と皮膚炎



(図2) 四肢端の痒痒と皮膚炎

## 検査～診断

細菌性毛包炎の病変部からはブドウ球菌の感染が検出された。その他の皮膚科学的検査において、外部寄生虫や真菌は検出されなかった。

厳密な除去食試験(セレクトプロテイン フィッシュ & ポテト、ロイヤルカナンジャポン)を実施したが、皮膚症状の寛解には至らなかった。したがって、本症例は**環境アレルゲン誘発性、皮表ディスバイオーシスを伴ったCADと診断した。**



(図3) 細菌性毛包炎による脱毛や表皮小環



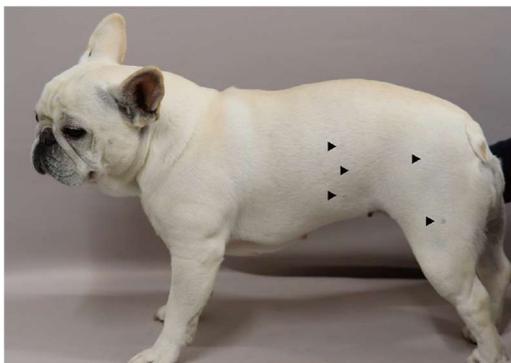
(図4)

## 投薬治療

初期治療としてオクラシチニブ(0.6 mg/kg, 1日2回)、外用抗菌薬(フシジン酸ナトリウム, 1日2回)により加療した結果、良好な治療反応を得た。

CADに伴う掻痒と皮膚炎はオクラシチニブ(0.6 mg/kg, 1日1回)で管理されたが細菌性毛包炎に起因する症状(特に脱毛: 矢頭)は不定期に再燃を認めた(図5, 6)。

## 投薬治療後



(図5)



(図6)

## 食事療法

## ●スキントピック給与期間:1ヶ月

当院での投薬開始から約2ヶ月後にスキントピックの給与を行った結果、CADの皮膚症状は安定し、給与開始1ヶ月後におけるオクラシチニブの投与頻度は週に2~3回まで減量することが可能であった。また、細菌性毛包炎の関与が疑われる脱毛病変も改善した(図7, 8)。

## 食事療法後



(図7)



(図8)

## ペットオーナーの反応

食事の切り替えは問題なく実施できました。また、脱毛箇所の改善だけでなく、毛質が良くなった印象がありました。



## 本症例の担当医 天辻先生による考察

本症例は膿皮症を頻回に併発するCADでしたが、療法食の給与後に、抗アレルギー薬を減薬した状態でも膿皮症の発生は認められませんでした。したがって、CADの症状の安定だけでなく、抗菌療法の使用頻度を減らす目的においても療法食の有用性が期待されます。

天辻 弾先生 サークス動物病院・アジア獣医皮膚科専門医協会レジデント [指導医:伊従 慶太先生]